



第13回最小侵襲脊椎治療学会
イブニングセミナー2

骨転移に対する最小侵襲脊椎治療 における Tips & Pitfall

日時

2023年
6月23日 **金** 16:50-17:50

会場

第**3**会場 仙台国際センター 2F 『桜2』
(現地開催のみ)

座長

山田 宏 先生

公立大学法人 和歌山県立医科大学 医学部 整形外科学講座 教授

演者

大下 優介 先生

昭和大学 横浜市北部病院 整形外科 講師

本セミナーでは、日本整形外科学会教育研修講演として下記のいずれか1単位を取得できます。

日整会専門医単位 (N) 【5】：骨・軟部腫瘍 【7】脊椎・脊髄疾患
脊椎脊髄病単位 (SS)

共催：第13回最小侵襲脊椎治療学会 / 日本ストライカー株式会社

お問い合わせ先：日本ストライカー株式会社 Spine Marketing 担当：室園 TEL：03-6894-0000 (代表)

骨転移に対する最小侵襲脊椎治療における Tips & Pitfall

大下 優介 昭和大学 横浜市北部病院 整形外科

がん治療の進歩にともない生命予後が延長し、骨転移の対応を要する症例は増加傾向である。転移の部位は脊椎に多くみられるが、大腿や上腕など四肢にも発生する。多くの症例は高齢であり併存疾患も多くその対応には慎重な判断と可能な限り低侵襲であることが望まれる。そのため、脊椎の病的骨折では極力負担の少ない PPS (percutaneous pedicle screw) による経皮的固定を我々は第一選択としてきた。PPS においても固定範囲や骨粗鬆症の有無による固定方法の選択は重要で、その選択によって合併症リスクは大きく変化する。

骨転移を認める患者では全身状態のシビアな症例が多く、特にインストゥルメンテーションを伴う手術においては、術前からの総合的な全身管理を必要とする。体格においても術後にいるい瘦が進行する症例が散見されるため、スクリュー刺入部の皮膚トラブルなどもしばしば経験される。

そこで、今回当院における判断基準や工夫など、我々の経験から得たコツやピットフォールなどについてお話ししたい。